

香川県三豊市（国内 13 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要（令和 2 年 12 月 2 日実施）

令和 2 年 12 月 2 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境

- ① 当該農場は、8 例目農場と一般道路を挟んで隣接し、5 例目、6 例目及びその疫学関連農場がある場所から約 400m 離れた丘陵地の中腹に位置し、周囲は山林に囲まれている。また、当該農場とその疫学関連農場は隣接していた。
- ② 農場敷地の周囲に複数のため池がある。最も近いものは堆肥舎横にあり、現地調査時には、ヒドリガモ 3 羽、ハシビロガモ 2 羽、オオバン 1 羽が確認された。
- ③ 当該農場にはウィンドレス鶏舎が 8 棟あり、発生時 2 棟を除き、採卵育成鶏が飼養されていた。発生鶏舎は農場の最も奥に位置する 2 階建て鶏舎の 1 階部分であった。

2 通報までの経緯

- ① 1 例目、4 例目及び 5 例目の発生に伴い実施した周辺農場検査において、陰性が確認されていた。
- ② 管理人によると、発生鶏舎における 1 日あたりの死亡鶏は、11 月以降 0~1 羽程度で推移していたところ、12 月 1 日に同一ケージで 3 羽、周辺の 2 ケージで 1 羽と 2 羽、計 6 羽の死亡が確認されたことから家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ③ 管理人によると、発生鶏舎の 12 月 1 日の死亡鶏は、4 列ある背中合わせの直立 4 段ケージの右から 2 列目の鶏舎奥の最下段に多く認められたとのこと。

3 管理人及び従業員

- ① 当該農場では 11 名の従業員が管理を行っており、毎日、鶏舎において鶏の健康観察を行うとともに、死亡鶏を回収して、農場内の死亡鶏処理装置で処理していた。
- ② 従業員ごとに担当する鶏舎は決まっておらず、全ての従業員は、隣接する疫学関連農場でも管理を行っていた。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 管理人によると、従業員は農場専用の作業着と長靴を使用していた。また、鶏舎毎に専用の長靴と踏み込み消毒槽を設置していたが、鶏舎毎の手指消毒や手袋の交換は行っていなかった。また、除糞ベルトのスイッチを入れるため、鶏舎奥にある入口から出入りすることがあったが、その際は長靴の交換や踏み込み消毒を実施していなかった。
- ② 鶏舎横には飼料タンクが設置されているが、当該タンク上部には蓋が設置されており、タンク内への野鳥等の侵入やタンク内の飼料への野鳥の糞等の混入の可能性は低いと考えられた。
- ③ 飼養鶏への給与水は、水道水が使われており、パイプによって各鶏舎に供給されている。
- ④ 鶏糞は除糞ベルトで、鶏舎外へ搬出され、農場内の鶏糞処理設備で堆肥化されている。なお、鶏糞処理施設には防鳥ネットは設置されていなかった。
- ⑤ 管理人によると、1 鶏舎には複数の日齢の鶏群が飼養されていることから、鶏舎ごとのオールイン・オールアウトを行っていないが、オールアウトになった場合は、鶏舎内の清掃・消毒を行っているとのこと。
- ⑥ 管理人によると、県内で発生する以前より、鶏舎周囲の消石灰散布による消毒を行なっている。また、鶏舎壁面に設置されているフィルターにも消毒液の散布を定期的に行なっているとのこと。
- ⑦ 管理人によると、車両が農場敷地内に入出入りする際、入口に設置された消毒ゲート

と動力噴霧器による消毒を行っているとのこと。

- ⑧ 発生鶏舎の鶏舎構造は、鶏舎奥側の壁面に設置された換気扇から排気し、入口側の壁面に設置されたフィルターから入気するタイプの鶏舎であった。換気扇の外側には開閉可能な板が設置されており、換気扇が停止する際にはこの板が閉まる。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 管理人によると、農場内ではカラスやスズメが確認されることがあるとのこと。なお、現地調査時にもカラスやスズメ等の小型の野鳥が確認された。
- ② 除糞ベルトが鶏舎外に出る開口部は板で閉じられていたが、隙間があり、管理人によると、ネズミ等の小型の野生動物が侵入可能とのこと。また、発生鶏舎の壁面には、一部補修はされていたものの、小型の野生動物が侵入可能な隙間があった。
- ③ 管理人によると、発生鶏舎内でネズミを見かけることがあり、定期的にネズミ対策（殺鼠剤の設置）を行っているとのこと。現地調査時には、発生鶏舎内にネズミによるものと思われる齧り痕、殺鼠剤を食べた痕跡が確認された。